朝一番に迎えのバスに乗り込み到着したサーキットを見て驚嘆。優に東京ドーム一個分はありそうな広々とした敷地に、ちょっとした実車レースもできそうなサーキットが敷かれていたからだ。無機質になりがちなコースを人間味あるものにしているのは、きちんと手入れされた芝生、手作り感のある白い柵、そしてログハウスのような建物。どこを見ても人の手が入っているのが感じられる。初めてなのに懐かしいような、不思議な感覚に見舞われた。「このサーキットは地元のクラブが所有していてね、みんなで手入れが行き届いているでしょう。全てクラブのメンバーだけで運営しているんです」と京商の岸本さんが教えてくれた。

このクラブは、今大会のサポートとして施設を提供するほか、大会期間中のランチや飲食物の準備、会場設営などあらゆる面で協力してくれているというのだ。「準備作業中のことなんですが、我々が時間を惜しんでファストフードのハンバーガーを食べているでしょう？　するとその隣りで、クラブの人たちはバゲットにチーズやハムを挟んで食べながら、ワインと会話を楽しんでいるんです。食事の仕方一つとってもスタイルが違うなぁ、と実感させられますよね」と岸本さん。

そう言われてみると、お揃いのブルーのTシャツを着て、忙しそうにしているクラブのメンバーは、穏やかそうで貫禄のある紳士たちだ。奥様方の指示のもと、ランチの準備に余念がない。顔を火照らせながら百本以上もあるチキンを炭火で焼いている姿は何とも言えず微笑ましい。

そこで、クラブのプレジデントを務めるジャンさんにお話を伺った。ちなみにジャンさんはフランスメジャー誌のジャーナリストだ。今回はシェフとして大活躍。

「このクラブが設立されたのは一九七八年です。ラジコン好きの仲間が集まって、自分たちのサーキットを作り自由にラジコンを走らせたい、という思いからなんですよ」。当初のメンバーは四〇人以上。核となる十人は、サーキット建設費を銀行から借りるために、自分の所有物を全て抵当に入れたという。

その十人衆の一人だったダニエルさんは感慨深げに当時を振り返る。「まだ生まれていない子供の財産や親の財産も抵当に入れたんですよ。建設費百万フランのうち、八五万フランを銀行から借りました。残りの十五万フランは四人が勤務していたSNECMA（ボーイングのエンジンを作っている会社）からの補助金です。十五年のローンでしたが、会員が増えたり寄付金が集まったりして一年に八・五万フランずつ返済できたんです」。家族の財産を抵当に入れるほどの情熱にも驚かされるが、一企業が個人の趣味の団体に補助金を出すというのも信じ難い。

しかしジャンさんによると、フランスでは珍しいことではないという。それだけではない。一九〇一年にできた「アソシエーション法」という法律に基づき、「アソシエーション」すなわち「クラブ」として国や自治体が公式に認めた団体には補助金を拠出するというのである。

クラブの活動内容は、スポーツ関係、文化、娯楽関係から住まいや環境、社会福祉や企業へのサービスにいたる分野にまで多岐にわたる。クラブ側から見ると、年間活動予算のうち、公的補助金が平均四二％を占める。その他は四〇％が会費、企業メセナ（企業の芸術文化支援金）が三％というから、補助金の存在は極めて大きい。

このような制度を採用している背景には、クラブは国や自治体の「パートナー」という考え方がある。「この仕組みで、文化が促進され地域が活性化します。それによって国としての無形財産が蓄積されるのです。高い税金をクラブへの経済支援という形で市民に還元しているというわけです」とジャンさん。クラブが自立的に活動し、その活動の発展に対して国や自治体が経済面で支援する。もちろん、それが将来的な国の文化発展につながることを見越してだ。両者は密接不可分というわけなのだ。

このようなメカニズムは、論理的な思考を得意とする男性ならではの発想だ。いくら情熱はあっても、金銭面での負担が大きければ個人でできることには限界がある。それでは個人の趣味はいつまで経っても個人の趣味にとどまり、文化として育たない。クルマもバイクもラジコンも、文化として根付かせるために日本政府が見習うべき点であろう。

けれど、クラブの活動を支えているのはそれだけではない。「会員の情熱とボランティア精神があるからこそ、三〇年近くも活動を続けてこれたんです」とジャンさん。

中心となる三〇人前後の会員は毎週末このサーキットに集まってラジコンを走らせ、施設の補修をし、組織を運営している。小学生から六〇代まで年齢の幅も広い。そして今回のような大会時には家族ぐるみでサポートする。まるで巨大なファミリービジネスを見ているような気になる。そして、親の世代から子供の世代へ、そして孫の世代へと文化が受け継がれていくのだなと感じたのだった。

さて、世界大会の方は連日激戦が繰り広げられた。トップの戦いだけあってラジコンの走るスピードに目が追いつかない。決勝レースでは、日本から参加した具志堅武治さんが終盤までトップをリードする活躍ぶり。残念ながら、ドイツチームの優勝で幕を閉じたが、ブルーとホワイトのワールドカップ ジャパンカラーがひた走る様子は痛快だった。

大会の締めくくりには、サーキット横に張られた大きなテントでパンケットが開かれた。午後十時を回ってようやく夕暮れがやってくる今の季節は、一日が長い。シャンパンがふるまわれ、歓談が始まる。選手もスタッフもクラブのメンバーも、最後の時間を惜しむかのようだった。

大人が趣味に徹し、その世界を仲間や家族と分かち合う――そんな理想的な遊びができるのも、国の文化振興のメカニズムがあってこそ。フランスでみたラジコン文化は、成熟した社会の一つの表れのように思った。

＊ 正式名称は、「アソシアシオン契約に関する一九〇一年七月一日法」。通称「一九〇一年法」。